

## 論文

## 大衆語論争の再評価とメディア戦略

—— 楽嗣炳, 陳望道を中心にして

絹川 浩 敏\*

## 要旨

1934年、中国の「国語」運動、文学運動において、重要な大衆語論争が展開された。大衆語論争は、500編を超える文章が各新聞・各雑誌に掲載され、大きな反響を呼んだ。蒋介石の「新生活運動」に反対することが、大きな目的であった。そして、これまでの文学論争は、主に雑誌、それも同人誌を舞台に展開されてきたが、今回は商業紙・誌、とりわけ新聞の文芸副刊（『申報』「自由談」、『中華日報』「動向」、白話化された夕刊紙（『大晩報』「火炬」）、「小報」と軽く見られていたタブロイド新聞（『社会日報』『社会月報』）で、展開されたのが大衆語論争の特徴である。そして、その論争の結果、翌年6月蒋介石の「新生活運動」に反対したとされる「文化運動についての私たちの意見」（表2）が公表される。ここには、左翼とみなされる団体・個人以外に多くの団体・個人が署名している。論争はしながらも、幅広い層が署名し、のちの文化面での抗日民族統一戦線の基礎を形作ったのが、大衆語論争と言えるのである。

## キーワード

大衆語 『中華日報』 『社会月報』 『大晩報』 楽嗣炳 陳望道

## 目次

はじめに

1, 大衆語論争の前段階

2, 大衆語論争の舞台

3, 3つの論文集, 天馬書店版と啓智書局版, 民衆読物出版社版

4, 大衆語論争の背景と結果

## はじめに

1934年、中国の「国語」運動、文学運動において、重要な大衆語論争が展開された。大衆語論争は、500編を超える文章が各新聞・各雑誌に掲載され、大きな反響を呼んだ。また、この論争をまとめた任重編『文言、白話、大衆語論戦集』（民衆読物出版社1934年9月）、文逸編著『語文論戦の現階段』（天馬書店1934年9月初版 10月発行）、宣浩平編『大衆語文論戦』（啓智書局 1934年9月（1935年9月再版））、同編『大衆語文論戦続二』（啓智書局 1935年1月）<sup>1)</sup>が発行された。このような大きな論争は五四新文化運動以降、はじめてとっていいものである。このような大きな論争である大衆語論争については、多くの業績が積み重ねられており、どんな論争であったかは明らかにされているが、何故この時期にこの問題で大きな論争になったのかという点について言及されたものは少ない。本稿は、楽嗣炳、陳望道の2人のメディア戦略という観点から、この問題を明らかにしていきたい。

### 1、大衆語論争の前段階

そもそもの論争の始まりは、大衆語の問題ではなかった。1934年5月、汪懋祖が「禁習文言與強令讀経」（『時代公論』110号）で、湖南省（何健省長）・広東省（陳濟棠省長）当局が、小中学校で読経を強制しようとしたことに対して、教育部が中止命令を出し、あわせて小学校で文言を習わせることを改めて禁止したことに対して、教育当局を批判したことに始まる。汪懋祖が「反動派」で教育部の役人であったかのような議論も以前は見られたが<sup>2)</sup>、彼は、当時蘇州中学（・高校）の校長であり、東南大学の教育学部教授でもあった。教育部の課程委員会の委員は務めていたが、官僚ではない。彼は、1916年アメリカへ留学し、コロンビア大学で修士号を取得した後、ハーバード大学で研究員になり、ハーバード大学教授バビットの授業を聴講し、1920年帰国した。アメリカでは、同じくバビットの薫陶を受けた呉宓ら、後に雑誌『学衡』を発行し、新文化運動・白話文運動に反対した人々と友人でもあった。帰国後は、北京師範大学教授、北京女子師範大学哲学系主任兼教授を歴任し、1926年、『学衡』派の拠点であった東南大学教育系主任兼教授となり、翌年の1927年、いくつかの学校を合併して新しく創設された蘇州中学の校長に就任した。バビットの「新人文主義」に感化された教育の専門家であった。

この文章に対して、真っ先に反論したのが当局者である呉研因である。呉研因は、師範講習所卒の小学校教師であり、五四運動の後、中華書局や商務印書館の編集者となり、国文教科書の編集を担当した。ジョン・デューイの信奉者でもあった。1923年に、小学校では白話文教

育を行うと定めた新学制である「壬戌学制」の施行にあたり、「新学制教科書」を出版し、好評を博した。同年第8回全国教育会連合会の委託を受けた『小学国語教学法概要』を主筆として起草した。1924年から3年間、フィリピンのマニラで華僑中学（・高校）の国文教師兼『華僑日報』の編集者もした。1927年に帰国し、1928年には、東南大学から改称した中央大学に勤務し、この論争時は、国民政府教育部初等教育司第1科長であった。根っからの小学校国文教師であり、国民政府の教育官僚でもあった。

この論争は、当初は小学校国文教育のありかたをめぐる論争であった。1934年6月、汪懋祖は「中小学文言運動」（『時代公論』114号）で、「ヨーロッパにおけるラテン語やギリシャ語の教育、アメリカでのバビットの中国の文言に対する評価などをあげ、中学に進まない者も多く、社会に出れば文言は必要」と小学校での文言教育の復活を求め、再反論した。

同月、許夢因も『中央日報』や『時代公論』に汪懋祖擁護の投稿をし、文言復興、尊孔読経を主張し、同年2月、蒋介石が提唱した「新生活運動」の方向に近付いた議論を展開する。しかし、一方でこの前年には汪懋祖の同僚であり友人でもある呉宓は、茅盾の『子夜』に高い評価を与えている。1933年4月に発表した「茅盾著長篇小説子夜」（『大公報』「文学副刊」275期）である。阪口直樹は、この呉宓の変化を次のように評している。「新文学の代表的作品である『子夜』を賛美することは、呉宓が五四新文化運動や「文学革命」そのものを評価するという自己矛盾におちいらざるを得ない～中略～ここにはたしかに、新文学提唱期においてその存在を十分アピールしてきた「学衡派」が、三〇年代の新文学全面的興隆期に直面して、その政策を全面对決から妥協的方向へと舵を大きく切らざるを得なくなった時代的背景を物語っている。興味深いのは、呉宓がこうして白話体長篇小説を高く評価した三〇年代初期、左翼作家陣営の側で「文芸大衆化」論争が起こり、瞿秋白、止敬（茅盾）、鄭伯奇、周起応（周揚）、寒生（錢杏邨）らの間で激しい論争が展開されたことである。」<sup>3)</sup>

呉宓は、1928年7月から編集していた『大公報』「文芸副刊」に、33年5月ごろから楊振声の協力を得て、朱自清や沈從文の白話文を掲載していく。そして、33年9月から、楊振声、沈從文らが編集することになる。すでに、『学衡』は33年7月に廃刊となっていた。

白話文運動の側の胡適も悩んでいた。「国民党が国を治めるようになってすでに2年になるが、今日に至ってもなお、我々は駢文の書簡や電報、古文の宣言、文言の新聞、文言の法令を読まざるを得ない。（中略）一つの革命した政府がなんと古文駢文の寿命を維持しているのである。徐世昌や傅岳芬の度胸すらないのであろうか。この一点において、私たちは、今日の国民政府を代表する国民党は反動的であると言わざるを得ない。」<sup>4)</sup>

呉研因も同様であった。呉ははじめこそ、教育部科長として、現行の教育方針を守ろうとしていた。しかし、「文言文」批判から、大衆語論争に展開すると沈黙せざるをえなかった。彼の役割は白話文教育を守ることであった。最後には、大衆語派が主導する「文化運動に対する

私たちの意見」に賛同することになるのだが。

## 2. 大衆語論争の舞台

楽嗣焯の回想によれば、1934年5月末から6月初めの間の時期、楽嗣焯と陳子展が陳望道を訪ねて、午後2時から夜11時まで、汪懋祖の文章をめぐって協議した。汪懋祖らに直接対抗するのではなく、胡適や周作人、林語堂など白話派に照準を定めることを決める。

6月初旬、「一品香」茶館で、陳望道、陳子展、沈雁冰、胡愈之、葉聖陶、楽嗣焯、夏丏尊、黎烈文、馬宗融（復旦教授）、黎錦暉、王人路、趙元任を招集して、食事会を開く。しかし、「国語」派の趙元任は参加しなかった。沈雁冰すなわち茅盾も、用事ですぐに退出したが、魯迅との連絡役を茅盾が担うことを了承した。陳望道起草の宣言をめぐって協議したが、宣言することの意味をめぐって意見がわかれた。宣言ということではなく、文言対白話、白話対大衆語、二つの戦線で戦うことが了承された。11時に食事を始め、午後5時過ぎまでかかった、という。<sup>5)</sup>

一方、陳望道の回想では、会同者は、胡愈之、夏丏尊、傅東華、葉紹鈞（葉聖陶）、黎錦暉、馬宗融、陳子展、曹聚仁、王人路、黎烈文（『申報』副刊「自由談」主編）、陳望道、楽嗣焯であり、12人であることは同じだが、茅盾が抜けており、曹聚仁と傅東華が加わっている。時期は明示されていない。黎烈文はこの時期すでに『申報』副刊「自由談」の主編を降りていた。

茅盾の回想では、場所は同じだが、時期は8月となっており、12人で相談したことは同じだが、全員の名を列挙せず、鄭振鐸、胡愈之、傅東華、葉紹鈞、黎烈文、茅盾が参加したことになっている。鄭振鐸の名は陳望道、楽嗣焯ともあげていない。目的も『太白』発行についてとなっている。<sup>7)</sup>

曹聚仁の回想では、1934年の夏のある午後、陳望道、葉聖陶、陳子展、徐懋庸、楽嗣焯、夏丏尊と曹聚仁の7人が、上海福州路のインドカレーの店で開いた会が「大衆語運動」の発端となっている。<sup>8)</sup>

楽嗣焯の回想にもどろう。6月15日になって、四馬路聚豊園で、より幅広い範囲で、第2回目の会議をもった。30名余りが出席した。曹聚仁、傅東華など、多くの新聞雑誌を掌握している人物も参加したというが、曹聚仁は参加しなかった可能性が高い。黎烈文はすでに主編を降りていたが、影響力は保持しており、張梓生主編の『申報』・「自由談」で、大衆語運動を始めることを決める。第一篇は、陳子展、2番手は陳望道、3楽嗣焯、4胡愈之、5葉聖陶、6夏丏尊、傅東華、沈雁冰は変名で文章を書き、陶行知が小結の文章を書く。前に書いた人が、原稿を次の人に届け、リレー式で前の人の文章を受けて書いていく。6月18日、陳子展「文言——白話——大衆語」、19日、陳望道「大衆語文学の建設について」、21日、楽嗣焯「文白

闘争から生きるか死ぬかの闘争へ」、23日、胡愈之「大衆語文について」、25日、葉聖陶「読書作文と大衆語文学について雑談す」、27日、夏丏尊「まず白話文を使ってお話になるようにしましょう」、28日、傅東華「大衆語問題討論の現段階と今後」、7月4日、陶行知「大衆語文運動の道」と、ほぼ予定通り掲載された。一方、楽嗣炳は、6月15日のあと、大衆語運動の前の2回の会議に出席しなかった曹聚仁、徐懋庸と偶然出会ったという。前の文章と矛盾する。よって、曹聚仁は1回目の会合に参加していなかった可能性が高い。6月15日、16日と徐懋庸と曹聚仁は相次いで「文言文」批判の文章を『申報』・「自由談」に発表していた。楽嗣炳は、8月と誤記しているが、後述する『太白』との関係で記憶が錯綜しているようだ。この間のいきさつを2人に話し、更なる協力を要請した。『中華日報』副刊「動向」でも聶紺弩を中心に、動きが起こっていた。『申報』・「自由談」より早く、6月7日には「訳文大衆化問題について」が書かれている。その後も、陸続と「動向」では文章が発表された。「大衆語論戦専刊」という特集も2度生まれ、1987年に編まれた『文芸大衆化問題討論資料』の「1934年大衆語問題討論文章索引」では、125編が取られており、最大の数である。

『申報』・「自由談」に陶行知の文章が載った7月4日までに78本もの論文が発表され、7月30日には、啓智書局で『大衆語文論戦』の編集が終わる。

8月17日に、『語文論戦的現階段』の序が書かれる（8月15日までのものから収録）。陳望道、楽嗣炳らが当初から予定していたのが天馬書店版であると思われる。

論争の焦点は、「文言文復興」に反対することから、五四白話と大衆語との関係をどのように見るのかに移っていく。

「普通話」は存在するのか。存在するとすればどこに？これ以降、大衆語派は、1932年の瞿秋白の論理に則った展開をしていく。

「無産階級は一般の「田舎の人」である農民とは違う。「田舎の人」の言語は原始的で、（自分達にしかわからない）偏ったものである。無産階級は五方雑居の大都会の中で、現代化した工場の中にいる。彼らの言語は事実上、ある種の中国の普通話（官僚の所謂国語ではない）を生み出しつつある。多くの地方の方言をとりこみ、各種方言の偏った面を消し去り、さらに外国の語彙を受け入れ、現代科学や芸術及び政治の新しい術語を創造しつつある。……要するにすべて書くものは「読んで聞き取れる」をスタンダードとすべきだし、必ずや生きた人間の言葉であるべきだ。」（瞿秋白「大衆文芸的問題」1932年6月）

魏猛克は、「実際に、「現代中国普通話」は普遍性があり、それは主に汽船、列車、船着場、駅、宿屋、飯屋、遊芸場などで行われており、工場はその影響を受けているに過ぎない。これはその地に寄留している労働者が運び込んだものである。……いわゆる普通話とは、交通が発達し、各地の人々の往来が日毎に活発になるにつれて、物事を交渉する便宜を求めて生まれたものである。」（「普通話與『大衆語』」『申報・自由談』34年6月26日）と、述べた。

魯迅も、総括的な文章「門外文談」で、「少数の読書人が書齋でこねあげたプランなど、とても実効おぼつかないだろうが、さりとてすべてを自然の成りゆきにまかせるのも良策ではない。いまでは開港場、公共機関、上級学校などではすでに普通話めいたものが成立している。そこで使われているのは、「国語」でもないし北京語でもない。音声やアクセントにそれぞれの地方の特色は残っているものの、方言でもない。しゃべるにも、きくにも、骨が折れることは折れるが、やってやれないことはない。もしそれを整頓し、発展に導くならば、大衆語の支脈になるだろうし、将来あるいは支脈どころか主力になるかもしれない。」(『申報』「自由談」8月24日～9月10日)と魏猛克の論を肯定している。

もう一つの論点は、「国語＝大衆語」となるかどうかという点であった。黎錦熙は国語が発展すれば自然と大衆語になるという論であったが、楽嗣炳は「大衆語はけっして国語ではない」「大衆語のスタンダードは上海の共通語である」といった主張を展開し、魯迅も上述のように「国語」でもないし北京語でもない」と言い切っている。

同じような論点だが、黎錦熙は「ことばは生き物であり、自然に属するがゆえに人為を加えてはならない」と主張し、大衆語を肯定するものにも「大衆語自然成長論」があったが、魯迅はこれも明確に「すべてを自然の成りゆきにまかせるのも良策ではない。」と否定する。「自然」とは「社会習慣あるいは支配的通念のことを言っている。ところがそれらはかくされたヘゲモニーの支配下にある」<sup>9)</sup>ものだ。

大衆語派は「国民語」を、国語派は「国家語」を目指したヘゲモニー争いをしているのである。

本稿では、これ以上論争の内容に立ち入ることを避け、その舞台に目を向けて行きたい。

前述のように、楽嗣炳、陳望道は戦術的に論争を仕組んでいく。まず、舞台を『申報』「自由談」に定めたが、聶紺弩もいち早く『中華日報』「動向」で論争に参加していく。6月2日、3日、7日と、陳子展の『申報』「自由談」に発表した文章より10日以上早い。生活書店の総合誌である『新生』週刊も6月13日に3本の関係論文を掲載する。また、徐懋庸、曹聚仁も前述のように6月15日、16日掲載と陳子展の17日より早かった。『申報』「自由談」は論争の火付け役の役割を担っており、陶行知の総括の文章が7月4日に掲載されると、翌日には「編集室啓示」を出し、大衆語論争に関する文章は掲載しないので投稿を受け付けない旨を宣言する。事実、7月26日に穆木天の文章が載るまで、関係する文章は掲載されなかった。『中華日報』は「大衆語論戦専刊」を組むなど『申報』「自由談」以上に、大衆語論争に力を入れていくことになる。上述のように最大の舞台を提供したのが『中華日報』であった。ここに割って入ったのが、曹聚仁が関与した『社会月報』である。曹聚仁は、大衆語の問題について、魯迅、呉稚暉、胡適、趙元任、呉研因らに手紙を出し、その返信を8月15日発行の1巻3期で掲載する。魯迅と呉稚暉の文が同じ雑誌に掲載された。さらに9本の論文、呉稚暉の第

二信、呉研因の復信が掲載された。兄弟誌である『社会週報』でも語文専号が1期のみ組まれた。『社会月報』では、続く9月15日発行の1巻4期で28本もの論文を掲載する大特集号が編まれた。ここには、任白戈、林語堂、沈從文らが曹聚仁からの手紙の返信を、周作人、俞平伯、胡適、錢玄同、魏建功、林語堂、吳稚暉、孫伏園、黎錦熙などそうそうたるメンバーが意見を述べた。10月15日発行の1巻5期でも11本の関連論文が掲載される。この間、9月には雑誌『太白』の創刊（創刊号には6本の関連論文が掲載された）、上述の3つの出版社から4冊の論文集が刊行されている。

『中華日報』は、国民党系の新聞・雑誌である。『社会月報』『社会週報』は、タブロイド新聞『社会日報』の月刊誌、週刊誌であり、34年6月に創刊したばかりであった。なぜ、国民党系の新聞の副刊やそのころ軽く見られていたタブロイド新聞が発行するできたばかりの雑誌が大衆語論争の舞台になりえたのか。

この時期、国民党の報道統制・言論弾圧が厳しさを加えていたことは周知の事実である。それは5次にわたる国民党の包圍掃共戦にちなんで、文化「困掃」と呼ばれる。1933年ごろから、転向者も続出し、左連の組織的活動は停滞する。この停滞を打ち破ったのが大衆語論争である。それは、『中華日報』や『社会月報』といったいわば商業紙を舞台にした戦いであった。

聶紺弩によれば<sup>10</sup>、彼が『中華日報』副刊「動向」の編集を任されたのは偶然であった。1933年年末、反日刊行物を発刊したことで日本を追放された聶紺弩は、上海に戻ってくる。売文によって生活を立てるしかなかった。街で偶然、モスクワ中山大学時代のクラスメートである孟十還に出会う。彼は、杭州で浙江省政府の下級官僚をやっており、『十日文学』という雑誌の編集もしており、聶紺弩は日本滞在中、この雑誌に投稿したこともあった。孟十還から、林柏生がしている『中華日報』の編集に誘われているが、自分はしたくないこと、編集は気苦労が多い割に実入りが少なく、小役人暮らしが気軽でいい、お前代わりにやれよということだった。林柏生も中山大学時代の知り合いだったので、俺にはさせないだろうというと、聶紺弩の『十日文学』に書いた文章を林柏生が読んでおり、気に入っているという。林柏生は、『申報』「自由談」の成功を羨んでおり、こうした副刊も発行しようとしていた。彼は自薦を申し出ると、即座にOKとなり、一日6元、一月180元 of 原稿料、毎日6,000字の出稿、別に聶紺弩に月給として100元の編集費が支払われることが決まった。のちに毎月2万字の出稿になったが。しかし、これは破格の待遇であった。

彼は「動向」を左連の陣地にした。魯迅も「動向」の寄稿者の一人となった。ただ、魯迅の原稿は、林柏生だけでなく、彼のボスである汪兆銘に見せて許可を取る必要があったが、一般の投稿者より原稿料を高くした。左連のメンバーにも積極的に依頼した。国民党、汪兆銘、蒋介石の明らかな批判をしなければ、何を書いても良かった。林柏生が求めたのは『申報』「自由談」のように売れることであった。周而復、廖沫沙、欧陽山、田間、章泯などが常連寄稿者

となった。『中華日報』の販売量が激増した。さながら、「動向」は左連の機関誌のような内容となり、8ヶ月間、240期あまり続くことになる。大衆語関連の文章は上述の索引では『中華日報』に137本に及ぶ論文が掲載されている。

一方、『社会月報』は、曹聚仁が関わっていた<sup>11)</sup>。曹聚仁が、『社会日報』主編陳靈犀と友人になったのは1931年前後であり、以降上海が1937年8月日本に占領されるまで、『社会日報』『社会月報』に原稿を書き続けた。1934年6月『社会月報』が創刊されると、翌月1巻2期に主編陳靈犀が「文話の論戦について」を書き、翌3期から前述のように盛んに大衆語論争の文章を掲載していく。その時に活躍したのは曹聚仁であり、彼の幅広い交友関係は、時に摩擦を引き起こしながらも、大衆語論争が大きな反響を呼ぶ舞台を提供し続けた。『社会月報』に掲載された関連文章は『社会週報』も含めて61本に及ぶ。

さらに、『大晩報』副刊「火炬」も、前述の索引では36編を掲載している。『大晩報』は、オーナーが張竹平、主筆は曾虚白である<sup>12)</sup>。張竹平は、『申報』でキャリアを積み、社長まで務めた人物であり、曾虚白は、曾樸の息子で、父と真善美書店を共同経営していた。1932年2月12日創刊で、時あたかも、1932年1月28日に始まった第一次上海事変の真っ只中であり、『大晩報』は「国難特刊」を試刊として発刊し、当時まだ有力な夕刊紙がなかったときであり、当日のニュースを速報し、多くの市民の支持を集めた。4月15日正式に『大晩報』に改められた。『大晩報』の特長は、紙面の白話化であり、胡適の嘆きにあったように、当時はまだ多くの新聞は文言で書かれており、特に社説は文言でのみ書かれていた。これを白話で書いたことから、多くの読者の共感呼んだ。『大晩報』副刊「火炬」の編集者は崔万秋<sup>13)</sup>で、左連のメンバーに執筆させることをいとわなかった。34年6月6日、左連のメンバーであった魏猛克の「鬼話(でたらめ)文の復活」を載せ、6月22日専論「文言白話の争い」を掲載し、以後、左連のメンバーである周文が、稲子、司馬疵、王剛などのペンネームで執筆している。胡風の夫人梅志は『胡風伝』で、周揚が崔万秋と親しくしており、胡風も紹介され、「火炬」への執筆を依頼されたが、胡風は書かなかったと述べている<sup>14)</sup>。『大晩報』の副刊で、文言白話の論争に積極的に関わっていったことは当然のことであった。

### 3, 3つの論文集, 天馬書店版と啓智書局版, 民衆読物出版社版

「東へ、それから南に曲がって真善美、真善美書店からまっすぐ行って民智、商務、中華といった老舗へいかねねばならない。中華から西がいわゆる書店街の四馬路である。書店がひしめいている。左に光華、楽群、春潮、北新、啓智、右には新文化、現代、群衆、世界、泰東、卿雲がある。これは、左派右派ではなく、光華と現代は洛陽娘のように仲良く隣り合っているし、春潮と楽群の若夫婦は、まだ2階で一緒に寝ている。群衆から北へちょっと曲がると新

開社街であるが、ここにも2軒の書店がある。新月と開明である。数えてみるとあわせて何軒になるかな。18軒である。」<sup>15)</sup>

趙景深が言及した啓智書局について、わかっていることは少ない。民衆読物出版社についても同様である。創業年、廃業年とも不詳である。<sup>16)</sup>

天馬書店については、楼焯春「記天馬書店」<sup>17)</sup>で概要がわかる。楼適夷の発案で、国民党員で左派だった韓振業が8,000元、楼焯春が2,000元あわせて1万円で創業、韓振業が支配人、楼焯春が副支配人、楼適夷が編集主任となった。しかし、楼適夷は、1933年～37年まで獄中にあっただけで、大衆語論争には直接タッチできなかった。葉以群が編集に加わっていたという証言があるので、編者の文逸は葉以群かもしれない。翌年、加わった尹庚が、『天馬叢書』を編集した。魯迅の大衆語関連文章をまとめた『門外文談』、葉籟士の『ラテン化概論』、『ラテン化テキスト』を出版している。

民衆読物出版社版は、文言・白話・大衆語・雑論の4つの部分にまとめられている。文言が13編、白話6編、大衆語31編、雑論5編となっているが、「文言」部分が、文言擁護というわけではない。魯迅の「此生或彼生」や徐懋庸の「文言文について」、聶紺弩の『『文言文』の形成と発展について』などもつばら文言を批判する文章もここに入れている。『申報』「自由談」から3編、『中華日報』「動向」から1編、『申報』「教育新聞」から1編、『時代公論』から2編が取られている。「白話」の部分も同様に白話批判の文章も入っている。6編しかないが、『申報』「自由談」2編、『中華日報』「動向」1編、『中央日報』2編である。大衆語の部分は、『申報』「自由談」9編、同「読書問答」3編、同「本埠増刊」3編、『中華日報』「動向」13編、『大晚报』「火炬」1編、『新語林』1編である。前述した陳子展「文言——白話——大衆語」、陳望道「大衆語文学の建設について」、楽嗣炳「文白闘争から生きるか死ぬかの闘争へ」、胡愈之「大衆語文について」、葉聖陶「読書作文と大衆語文学について雑談す」、夏丐尊「まず白話文を使ってお話になるようにしよう」、傅東華「大衆語問題討論の現段階と今後」、陶行知「大衆語文運動の道」といった計画者達が、『申報』「自由談」に掲載した文章は、葉聖陶のものが雑論に回されたが、すべて収められている。「雑論」部分は、5編、葉聖陶のほかは、聶紺弩の文章が3編、周文のものが1編である。民衆読物出版社の編集者（任重）にも、情報は伝わっていた。あるいは、陳望道は「任重」というペンネームを使ったことがあるので、陳望道自身が編集者かもしれない。

天馬書店版は、序のほかに93ページにも及ぶ長い編者の解説がついている。さらに、附録一として、「語文論戦文献編目」と題した、8月15日『社会月報』までの論文名が176編、附録二として、38編の論文が収められている。こちらは、前述の「索引」にとられている37編（ただし、3回連載したものが1編として収録されているので論文としては35編）のうち、『申報』「自由談」14編、『申報』「読書問答」1編、『中華日報』「動向」10編（専論を入れると12編）、

『大晩報』「火炬」2編、『新生』1編(3回連載)、『新語林』1編、『独立評論』から胡適のものが1編、『時代公論』から、汪懋祖、許夢因の文が1編ずつ計2編、『社会月報』2編、陳望道ら計画者の8編はすべて収められている。

啓智書局版は、34年9月に52編、翌年1月に38編が続二として刊行されている。9月版は、索引にとられているのは43編、『申報』「自由談」18編、『申報』「本埠増刊」7編、『申報』「読書問答」3編、『申報』「教育新聞」から1編、『中華日報』「動向」9編、『大晩報』「火炬」4編、『時代公論』から、汪懋祖の文が1編のみである。計画者の8篇はすべて収められている。

三つの版にすべて収められているのは、13編、2つの版に収められているのは、民衆読物出版社版と啓智書局版とが8編、民衆読物出版社版と天馬書店版とが10編、天馬書店版と啓智書局版とが、1編のみである。民衆読物出版社版のみに収められているのは、14編、天馬書店版のみが12編、啓智書局版の9月版のみが19編、35年1月版は24編のうち22編が単独である。これは、1月版は34年8月1日の呉稚暉「大衆語万歳」以降のものを取っているからである。

こうしてみると、陳望道、楽嗣炳の6月15日の計画はこの4冊の論集にも貫徹していることがわかる。

#### 4、大衆語論争の背景と結果

第一次上海事変(一・二八)後は中華ナショナリズムの高まりが最高潮に達した時期である。『大晩報』も、このとき創刊され、大きく部数を伸ばし、数ヶ月で『申報』の発行部数を上回ったと伝えられている。著作者達も、中国著作者抗日会を組織し、陳望道は秘書長、楽嗣炳は組織部長となった。このときは、左連の急進的な方針で内部対立が起り、この中国著作者抗日会は長く続かなかつたが、陳子展も加わっていた。<sup>18)</sup>

一方、国民党の弾圧、思想統制への反発もあった。1934年2月19日蒋介石が南昌でいわゆる「新生活運動」を提唱した。同じ月に、魯迅、茅盾ら左翼作家を中心に、書籍149種、刊行物76種が発禁処分となった。5月には、図書雑誌審査委員会が上海に作られ、統制が強化された。6月16日には、毎年8月27日を孔子生誕記念日とすることを決定し、この年の8月27日、はじめての孔子生誕記念日に南京他各地で記念活動を行い、国民政府は葉楚傖を曲阜に派遣した。こうした復古的風潮の中で、陳望道たちが再び立ち上がったのがこの運動であった。

この「大衆語運動」が成功といえる成果を挙げたのは、メディアの大衆化・商業化が一定程度進んでいたからである。文学雑誌『現代』は32年5月に創刊され多くの読者を獲得した。

翌年7月には生活書店から『文学』が創刊され、こちらも読者の獲得に成功した。34年は「雑誌年」と呼ばれ、多くの雑誌が創刊される。これは、単行本が売れなくなったかわりに、安い雑誌が買われたという側面もあるが、新文学の読者が大きく増えたことの反映でもあった。小学校で白話教育のみがなされるようになってすでに十年、識字層は大きく増えていた。知識層ともいえる中学生数も、16年6万有余、22年10万有余、29年25万弱、1933年41万有余と、10万部発行の新聞の読者層となっていた。

こうした中で、陳望道らは、著作者の合同を再び図っていく。一つは、雑誌『太白』の発行である。ここに新たな仕組みを導入する。特約寄稿者制度である。『太白』は、10人の編集委員の他に、68人の特約寄稿者がいた（次頁、表1）。魯迅、茅盾らの覆面編集委員もいた。この中には左翼作家以外の著作家も多く加わった。

35年1月には、何炳松、樊仲雲らが『中国本位的文化建設宣言』いわゆる「十教授宣言」を行い、復古的風潮になびいていくかのような宣言を行っていた。胡適や陳序経らの批判を受け、論争に発展する。文化建設協会は、国民党CC派の傘下にあり、「新生活運動」を文化運動の側面から支える意味合いが強調されてきたが、阪口直樹は、10人の関係などを詳細に分析し、「何炳松と樊仲雲の二人が署名者の中心にいたのではないか」という仮説を立て、「何炳松は国民党に引きずられたというより、むしろ政治的偏見を持たない、リベラルな“しぶとさ”を感じさせるのである。～中略～国民党側にモダンで政治色のすくない知名人を利用しようとした意図と論理があったように、署名者側にも別の意図と論理があったはずであり、「宣言」が持つ折衷的性格と無関係ではないと思う。／要するに、『文化建設』編集者としての樊仲雲が、陳立夫との関係を調整しながら「宣言」の裏方役をこなし、一方何炳松は、国民党の力を逆利用しながら、商務印書館と暨南大学につながる人脈をフルに利用して、自らの構想を実現させようとしたのだと考えることもできるということである。」と結論づけている<sup>19)</sup>。

鏡屋一によれば<sup>20)</sup>、『教育雑誌』で1935年5月「読経問題特集号」が編まれ、100名余りの知識人々にアンケートを行った。その結果、「(1) 読経に全面的に賛成 唐文治、何健、錢其博、江亢虎ら16名 (2) 読経に部分的に賛成 (a) 初級小学は不可、高級小学以上は可 陳立夫ら5名 (b) 小学は不可、中学は可 蔡元培、王新命ら12名 (c) 初級中学は不可、高級中学以上は可 章益ら3名 (d) 中学以下は不可 傅東華、陳高備ら10名 (e) 専門家は可、青年(学生)は不可 陳望道、謝六逸、孫寒冰ら15名 (3) 読経に全面的に反対 陶希聖、周予同、柳詒子、葉青ら12名」となった。当時の政策は(2)の(b)であり、蔡元培、王新命らが現状肯定である。CC派の陳立夫は、読経をより強める意見だが、十教授のうち、王新命は現状維持、それ以外は章益が高級中学以上、陳高備は中学以下不可、孫寒冰が青年は不可、陶希聖、十教授ではないが宣言に積極的に関わったとされる葉青も全面的に不可であった。「読経問題」についても、十教授は反対派であった。

6月、蒋介石の「新生活運動」に反対したとされる「文化運動についての私たちの意見」(表2)が公表される。ここには、左翼とみなされる団体・個人以外に多くの団体・個人が署名している。特に注目されるのは、団体では、現代雑誌社、論語社である。個人では、現代雑誌社の汪馥泉、施蟄存と杜衡(この2人は6巻1期1934年11月号ですでに『現代』から退いていたが)、論語社の陶亢徳と李青崖、団体としては署名しなかったが、『文化建設』の樊仲雲と葉青もいた。教育部の官僚でありながら、現行政策を守ろうとした呉研因も署名した。論争はしながらも、幅広い層が署名し、のちの文化面での抗日民族統一戦線の基礎を形作ったのが、大衆語論争と言えるのである。

こうした舞台を提供したのが、商業紙・誌、とりわけ新聞の文芸副刊であった。それまで、鴛鴦胡蝶派や礼拝六派の拠点であったタブロイド新聞や新興の夕刊紙が、積極的に取り上げ、人間的なつながりもあったが、「売れる」という純商業的な理由から左翼作家に執筆を依頼し、大きな論争に発展したはじめての文芸論争が、「大衆語論争」といえるのではないだろうか。

表 1

## 太白編集委員

艾寒松 傅東華 鄭振鐸 朱自清 黎烈文 陳望道 徐調孚 徐懋庸 曹聚仁 葉紹鈞  
郁達夫

## 特約寄稿者

艾蕪 巴金 冰心 沉櫻 杜重遠 方光燾 豐子愷 風子(唐改) 佛朗 谷人(郭沫若)  
高滔 耿濟之 顧均正 何穀天 洪深 黃芝岡 黃石 黃源 胡仲持 胡愈之  
張天翼 賈祖璋 金仲華 靳以 韜奮 周越然 周木齋 周予同 趙元任 朱光潛  
克士 老舍 老戈 李健吾 李輝英 李滿桂 廖楚容 劉薰宇 劉廷芳 落華生  
馬宗融 孟斯根 聶紺弩 歐陽山 任白戈 小默 夏丐尊 夏征農 沈起予 許傑  
陳子展 陳守實 謝六逸 孫伏園 陶行知 草明 蔡慕暉 蔡希陶 王魯彥 王伯祥  
王統照 萬迪鶴 魏猛克 吳組緝 吳文祺 楊騷 葉籟士 樂嗣炳

表 2

## 文化運動についての私たちの意見

## 団体

文学社、文学季刊社、文芸画報社、中学生雑誌社、太白社、世界知識社、芒種社、青年界社、東京雑文社、東京詩歌社、東流文芸社、現代雑誌社、新小説社、新生週刊社、論語社、訳文社、読書生活社

## 個人

大戈	王伯祥	王志端	王承志	王特夫	王琳	王集叢	王淑明	王魯彦	王文川
王西微	方之中	方光燾	白丁	史国綱	艾思奇	艾寒松	伍蠡甫	任白戈	江天蔚
老舍	向覺民	伯韓	沈起予	沈致遠	沈百英	辛人	何家槐	沙丁	宋安
呂鑑平	汪若虚	汪静之	汪馥泉	余楠秋	李公樸	李青崖	李炳煥	李華卿	李輝英
杜衡	金仲華	吳研因	吳俞嵐	吳文祺	吳組緝	吳清友	林庚	林煥平	孟克
孟式鈞	邵宗漢	周建人	周曙山	周木齋	周予同	郎魯遜	袁冰	姚雪垠	姚名達
姚非厂	柳亞子	柳湜	郁達夫	胡仲持	胡繩	施蟄存	孫徯工	孫用	孫起孟
孫克定	翁同書	韋休	馬千里	馬国亮	馬宗融	奚如	殷佩斯	徐調孚	徐工美
徐懋庸	徐應昶	徐霞村	夏巧尊	夏征農	倪文宙	高滔	張明養	張天澤	張仲實
張天翼	曹聚仁	曹宇君	曹養吾	陳望道	陳子展	陳大悲	陳端志	陳康白	章靳以
康嗣群	畢雲程	陶亢德	郭建英	陸衣言	陸上之	庶謙	符竹因	葉聖陶	葉靈鳳
葉作舟	葉籟士	葉青	焦風	黃芝岡	黃覺民	傅東華	賀昌群	万家寶	葛喬
楊東蓀	楊霽雲	趙景深	趙景源	趙家璧	黎錦明	漆琪生	潘光迴	潘震亞	鄭振鐸
鄭伯奇	樊仲雲	蔣建白	樂嗣炳	歐陽凡海	劉大杰	錢歌川	錢子矜	謝六逸	應人
蹇先艾	聶紺弩	譚勤餘	蕭乾	顧君義	顧均正	顧仲彝	顧燧		

『芒種』1935年6月5日、『文学』第5巻第1号1935年7月1日、『太白』1935年7月5日、下線は大衆語論争の計画者、**太字**は左連メンバー（及びメンバーであった）人物（姚辛『左連史』による）、網掛けは注目すべき人物

## &lt;注&gt;

- 1) 『中国現代文学資料與研究』（上）北京師範大学出版社（2008）253頁によれば、『大衆語論戦続編1』が宣浩平編で1934年に発行されたようだが、未見である。民衆読物出版社版と天馬書店版は、『民国叢書第一編52』（1989）として復刻されている。天馬書店版は香港での復刻版もある（出版年不詳）。啓智書局版の二冊は、上海書店から1987年に復刻されている。
- 2) 茅盾の回想録がその説を補強したのかもしれない。『私の歩んだ道』（中）人民文学出版社（1984）156頁で「国民党教育部汪懋祖なるもの」と指摘している。
- 3) 阪口直樹「反“俗”の文学集団——学衡派」『同志社商学』54巻1/2/3号2002年12月、『中国現代文学の系譜』東方書店2004年2月所収
- 4) 『新文化運動と国民党』1929年11月29日、原載『新月』第2巻第6、7号合刊、『人權論集』上海新月書店1930年2月出版
- 5) 「樂嗣炳大衆語運動と魯迅先生を語る」『文芸大衆化問題討論資料』上海文芸出版社（1987）、吳中傑「信徒的天路歷程——樂嗣炳先生を記す」『海上学人』復旦大学出版社（2012）
- 6) 「陳望道大衆語運動を語る」『文芸大衆化問題討論資料』（1987）

- 7) 『私の歩んだ道』（中）人民文学出版社（1984）
- 8) 『我與我的世界』北岳文芸出版社（2001），曹聚仁の回想は、汪懋祖の著作と許夢因の著作を混同するなど、香港で記憶に基づいて書いた部分があり、記憶違いも多い。
- 9) 田中克彦「近代言語学イデオロギーと日本国語イデオロギー」庄司博史編『ことばの二〇世紀』ドメス出版（1999）
- 10) 周健強編『聶紺弩自叙』團結出版社（1998）
- 11) 「陳靈犀與社会日報」『我與我的世界』北岳文芸出版社（2001），陳靈犀「社会日報雜憶」『新聞研究資料』1981年04期，CNKIより
- 12) 『大晚報』については、袁義勤「晚報的成功——《大晚報》雜談」『新聞研究資料』1991年1期，閔大洪「曾虛白與《大晚報》」『新聞記者』1987年9期，いずれもCNKIより
- 13) 韓志平「崔万秋其人其事」『春秋』2009年6期，毛徳伝「崔万秋は文化特務ではない」『炎黄春秋』2011年7期，いずれもCNKIより
- 14) 梅志『胡風伝』北京十月文芸出版社（1998）259頁
- 15) 趙景深『申報』副刊「芸術界」（1929年1月6日）
- 16) 朱聯保『近現代上海出版業印象記』学林出版社1993年2月 257-258頁，天馬書店については比較的詳しい記述がある。66-68頁
- 17) 『百年書業』上海書店出版社2008年5月，原載『古旧書訊』1981年1期2月
- 18) 拙著『『売文社』としての大江書鋪』『季刊中国』116号2014年3月，阪口直樹「二つの“救国”宣言をめぐって」『野草』46号1990年8月，『中国現代文学の系譜』所収
- 19) 「中国抗戦時期文学と“民族”（四）——“中国本位の文化建設宣言”をめぐって」『同志社外国文学研究』第68号（1994），『十五年戦争期の中国文学』所収
- 20) 「中国文化のレシピ——1935年の読経問題」『目白大学総合科学研究』3号（2007）

#### ＜参考文献＞

- 大原信一（1994）『近代中国のことばと文字』東方書店
- 大原信一（1964）『『大衆語』論争と共通語の問題』『人文学』同志社大学人文学会
- 阪口直樹（1996）『十五年戦争期の中国文学 国民党系文化潮流の視角から』研文出版
- 阪口直樹（2004）『中国現代文学の系譜』東方書店
- 中鉢雅量（2004）「民国時期言文一致実現への苦闘（下）」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』27号
- 杉本達夫（1975）『『俗語』と『新文語』』『中国古典研究』20号
- 鈴木将久（2003）「上海都市大衆文化と『民族』の問題」『明治大学人文科学研究紀要』第52冊
- 宮尾正樹（2000）「大衆語論争における普通話の問題（一）：瞿秋白と普通話」『お茶の水女子大学中国文学会報』第19号
- 文貴良（2003）「大衆話語：対20世紀30, 40年代文芸大衆化的論述」『文芸研究』2003年2期
- 大塚豊訳（2014）『国際連盟教育使節団 中国教育の改進黨—ヨーロッパ四賢人の見た日中開戦前夜の中国教育』広島大学出版会
- 李春雨 楊志編（2008）「六 “文芸大衆化” 的討論」『中国現代文学資料與研究』（上）北京師範大学出版社
- 張衛中（2013）『20世紀中国文学語言変遷史』中国社会科学出版社
- 黄曉蕾（2013）『民国時期語言政策研究』中国社会科学出版社
- 姚辛（2006）『左連史』光明日報出版社